

ICTを活用した新たな保健教育の試み： 小中一貫教育を効果的に行うために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): 保健教育, 小中連携, ICT, 生活習慣, がん教育 キーワード (En): 作成者: 伊藤, 寿子, 鈴木, 恵美, 鎌塚, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027937

I C T を活用した新たな保健教育の試み

一小中一貫教育を効果的に行うためにー

伊藤寿子

(静岡大学教育学部附属浜松小学校)

鈴木恵美

(静岡大学教育学部附属浜松中学校)

鎌塚優子

(静岡大学教育学部)

A Study of New Approach to Health Education Utilizing Information and Communication Technology
-Effective Achievement for integrated education from Elementary through Junior High school-

Ito Hisako, Suzuki Emi, Kamazuka Yuko

要旨

静岡大学教育学部附属浜松小学校と中学校は、2021年度の小中一貫校化に向けて準備を進めている。保健教育においても小中一貫教育を視野に入れ、本年度、検討を始めた。

静岡大学教育学部に養護教育専攻が設置され、小学校は2017年度に、中学校は2018年度を機に、附属小中学校の養護教諭が兼職発令を受け、養護教諭が1人で保健教育の授業実践を行ってきた経緯がある。そこで、小学校3年生での体育科保健領域「けんこうな生活」および中学校での保健体育科保健分野「健康な生活と疾病の予防」の授業連携に着目し、その連携方法について検討を重ねた。保健教育をいかにして印象深く、自分事としてとらえる実践を行えるかについて深澤(2019)は、「他者の視点」を取り入れることでより様々な項目で行動変容につながる可能性があることを示唆している。そこで、連携の手立てとして、オンライン会議による小中交流を取り入れ、対話的で深い学びの実現に向け実践を試みた。

健康について小学生と中学生が語り合うという対話的学びは、双方において学習意欲を高めると共に、児童生徒が自らの生活習慣を振り返り、健康の保持増進や回復に主体的に取り組む態度を育むのに有効な実践であった。また、オンライン会議の活用は物理的距離を解消し、スピード感を持って繋がることができるという利点を確認することができ、小中一貫に向け、合理的な手段の一つであったと考えられる。

キーワード：保健教育 小中連携 I C T 生活習慣 がん教育

1. はじめに

小中学生を取り巻く社会環境は急激に変化しており、予測困難な未来となっている。また同時に、健康を脅かす不安材料も増え、特に本年においては、新型コロナウイルス感染症という、未知の感染症の出現によって、いかにして健康を守り、いかにして健康的な生活を送るかについて、より一層深く考えた年でもあった。

2017年度に告示された学習指導要領の改訂の経緯に「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようになることが求められている。」と述べられている。児童生徒が、生涯にわたって心身の健康を保持増進していくためには、健康課題の把握やニーズに応じた保健教育を小中一貫して実践していくことが大切であると考える。

小学校3年生の保健領域「健康な生活」は、健康について考え、健康な未来を切り拓いていく学習の最初の単元である。また、学習指導要領改訂により、中学校保健体育科保健分野「健康な生活と疾病の予防」は中学校3年間をかけて学ぶこととなり、生活習慣病などの予防でがんを取り扱うことが示された。

静岡大学教育学部附属浜松小中学校は、2021年度小中

一貫校化に向け準備を進めている。同敷地内にありながら校舎が離れているということに加え、カリキュラムの違いから時間割を合わせることが難しく、交流するための環境が十分に整っていないという課題がある。加えて、世界的に新型コロナウイルス感染症が流行し、2020年3月には感染症対策として全国的な休校措置という前代未聞の処置が取られた。学校再開後も、感染症予防の観点から小学生と中学生が直接の交流を行うことが困難な状況に直面した。

そのような状況の中、児童生徒の学習を保証するため、I C Tを活用した教育が広く注目されるようになった。小中両校でも以前よりタブレット端末を使用した授業は行われていたが、休校中、学校からの動画配信や、自宅や塾などでI C Tに触れる機会が増え、機器の扱いに慣れている児童生徒も増加した。新しい生活様式を守りながらも他者と協働する教育を行うにはどうすれば良いか、どのような形で小中連携を深めていくべきかを、大学教授と二人の養護教諭の三人でオンライン会議システムを利用し、話し合いを積み重ねた。養護教諭同士もオンライン会議システムのチャット機能を最大限に活用した。その結果、物理的距離を解消し、また感染症予防も兼ねた小中交流を実践することとした。

小中が連携して保健教育を充実させ、健康について考えていくための手立てを検討し、小学校3年生と中

学校2年生の授業連携に着目した。この2つの学年は、小学校時に1年生と6年生のペア学年だった。また、小学生にとっては5年後の未来を生きる先輩であり、中学生にとっては5年前の自分から現在にいたるまでの過去を振り返る後輩である。交流は、小学校3年生は自分の未来に目を向け健康への興味関心を高めることをねらいとし、中学校2年生は、小学校3年生との対話的学びを通じて、生徒自らの生活習慣を振り返り、健康の保持増進や回復に主体的に取り組む態度を育てることをねらいとした。

本研究では、小学校での学びの継続と中学校での学びのさらなる発展のため、ICTの利点を最大限に活用し、小中が連携していく保健教育の試みを通じて、さらには地域の養護教諭へ提案していくことを目的とする。

2. 小中連携の流れ

小学校と中学校が、連携して保健教育を推進していくために、以下のような授業の流れを計画した。

実施時期	小学校	中学校
6月上旬～	オンライン会議 (小中養護教諭・大学教授) 実践について計画および検討	
7月下旬	アンケートの実施 (アンケート集計 ソフト利用) ・健康に関する イメージ	アンケートの実施 (アンケート集計 ソフト利用) ・生活習慣 について ・がんの知識 について
9月中旬	健康会議メモ「健康のイメージ」 小学校⇒中学校へ依頼	
9月下旬	健康会議1 (オンライン会議) 【小学校主催】 中学生に「健康のイメージ」 についての話を聞こう	
10月～ 11月	体育科 (保健領域) 授業実施 5時間	保健体育科保健 授業実施 3時間
10月 中旬	生活習慣・がんについてのアンケート 中学校⇒小学校へ依頼	
12月 上旬	健康会議2 (オンライン会議) 【中学校主催】 小学生に「がん予防」について アドバイスしよう	
12月 上旬	アンケートの実施 (アンケート集計 ソフト利用) ・授業の振り返り ・感想	アンケートの実施 (アンケート集計 ソフト利用) ・第1回と同内容 ・授業の振り返り

3. 小学校の授業実践

1) 対象：3年1組35名・3年2組35名

単元：けんこうな生活

方法：兼職発令により、養護教諭が1人で授業を実施。本実践は、先に3年1組で実施し、その後3年2組で実施した。

2) 単元計画

時数	学習計画
1	自分が考える「けんこう」をイメージして絵を描く。 【モジュール】 アンケート集計ソフトを利用し、アンケートに答える。 【モジュール】 中学生とオンライン会議をして、中学生が考える「健康」は、どのような状態かを知る。 【モジュール】
2	健康でいるためには、何が関係しているか考え、班で交流して整理する。
3	「健康な状態」でいるために「一日の生活」がどうかかわっているか考える。
4	「健康な状態」でいるために「体の清潔」がどうかかわっているか考える。
5	「健康な状態」でいるために「環境」がどうかかわっているか考える。
	中学生の「がんの予防」の学習から小学生のアンケートを基に、オンライン会議でアドバイスを聞く。 【モジュール】 アンケート集計ソフトを利用し、アンケートに答える。 【モジュール】

3) ICTを利用した事前アンケート調査

単元の導入で、アンケート作成ソフトを利用し、タブレット端末からQRコードを読み取り、アンケートに回答させた。アンケート集計ソフトでは、その場でクラスの結果を表示することができるため、単元導入時のクラス全体の健康に関する意識を確認した。小学校3年生では、タブレット端末での記述式の質問に対し、ローマ字やひらがな入力などの入力に慣れていない児童が多いため、音声入力を活用した。

「健康でいるためにどんなことが関係していると思いますか」の質問では、ほとんどの児童が「睡眠」や「食事」「運動」のことなど、生活に関する回答をしていて、授業終了後の回答の変容を期待し、実践を行うこととした。



〈アンケート入力の様子〉

4) 健康会議1（オンライン会議）…【小学校主催】

（1）対象と実施時期

対象：①小学校3年1組／
中学校2年1組・2年3組前半
②小学校3年2組／
中学校2年2組・2年3組後半
実施時期：令和2年9月末～10月上旬
時間：小学校…モジュール
中学校…朝の会の15分間

（2）主題

ア) 小学校：中学生が考える健康な状態・健康のイメージを聞こう。
イ) 中学校：小学校3年生へ中学生が考える健康な状態・健康のイメージを伝えよう。

（3）ねらい

ア) 小学校：中学生と健康について話すこと
で自分の未来に目を向け、健康への興味関心を高め、主体的に取り組む態度を育てる。
イ) 中学校：初めて健康について学ぶ小学生と健康をテーマに語り合うことで、自らの生活習慣を振り返り、健康の保持増進や回復に主体的に取り組む態度を育てる。

（4）概要

交流前日までに、小学校では、養護教諭がクラスで交流の目的や概要について説明し、やり方の説明を行った。中学校では養護教諭が各クラスに交流の目的や概要について説明し、健康会議メモに中学生が考える健康な状態・健康のイメージを記入させた。また、養護教諭同士も、スムーズに会議が進むよう、事前にタブレット端末の確認および接続確認等を行い、当日に備えた。

（5）健康会議当日の様子

小学生が考える健康を絵で提示した後、中学生の意見を聞く形で実践を行った。交流するグループは、健康会議1で行ったグループと同一とし、オンライン会議システムを利用し交流を行った。

当日、全体会では小学校養護教諭が目的と当日の流れ、注意事項について説明した。その後、ブレイクアウトセッション機能を利用し、ペアグループに分かれて交流を行った。グループ交流の司会進行は中学生が行った。

時間を有効活用するため、あらかじめ中学生に健康会議メモの記入を依頼してあったので、メモを利用しながら中学生は小学生にわかりやすい言葉で伝えてくれた。小学生の提示した絵は、「睡眠」「運動」などの生活習慣のものが多かったのに対し、中学生は「ニコニコ笑顔でいること」等の心に関することや、「周りの環境が整っていること」等の環境に関することなど、小学生からは出てこなかった意見が中学生から出され、小学生は、健康のイメージの広がりを自覚できた。



〈中学生に健康の絵を見せる様子〉

5) 保健 第2時「健康を仲間分けする」

中学生との交流後、健康でいるためには、何が関係しているかを考え、班で交流して整理していくという授業実践を行った。小学生から出た意見はピンク色、中学生から聞いた意見は水色の色違いの付箋を使い、色からも健康のイメージが増えたことを実感できるよう工夫した。中学生が記入した健康会議メモは、話合いの途中で資料としても活用した。交流したことで健康のイメージが増え、それらを仲間分けしたことで、健康でいるために、様々な要因がかかわっていることに気づくことができた。



〈班で仲間分けをする様子〉

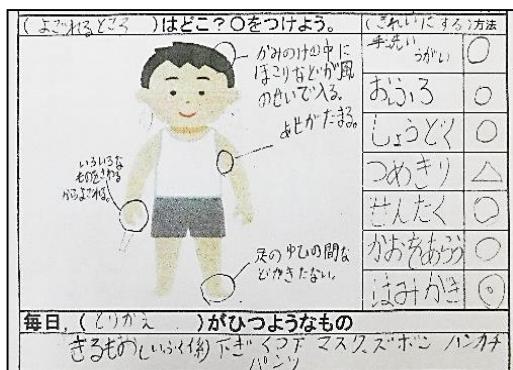
ワークシートに、A女は「健康でいるためには、自分の努力が必要だとわかりました」と記入し、B男は「健康は仲間分けしてみれば思ったよりもたくさんありました。でも、僕はまだあると思います。なのでいろいろ調べてみたいと思います。いつか調べ学習の課題になるかもしれません」と記入した。仲間分けにおいて、中学生との交流が、健康との関係を探る活動に対して有効な手立てとなり、小学生の偏った考え方を広げるきっかけとなつた。

6) 保健 第4時「健康な状態と体の清潔の関係」

班で仲間分けした3つの内容を活用し、その後の学習では、「健康な状態と1日の生活」「健康な状態と体の清潔」「健康な状態と環境」の関係を考える学習を取り上げた。健康課題を自分事として捉えられるよう、ワークシートを工夫し、自分の生活や行動を振り返る欄を設け、また仲間と交流しながら気づかせるようにする工夫を行つ

た。

「健康な状態と体の清潔」の関係を考える学習では、「汚れるところはどこ?」「きれいにする方法は?」とワークシートに個々で記入後、ホワイトボードを囲みながら班で意見を出し合った。各班の発表時には、ホワイトボードをタブレット端末で撮影し、テレビに映し出しながらクラス全体で意見を共有した。友達の意見を取り入れながら、自分の生活を振り返る活動は大変有効で、C男は、「毎日、菌がついていたのに気づいたので、家に帰ったら先に手を洗うことにしました」とワークシートに記入した。



〈ワークシート活用の様子〉

7) I C Tを利用した事後アンケート調査

事後に再びアンケート集計ソフトを利用し、アンケートに回答させた。「中学生との健康会議はどうでしたか」では、81%の児童が「よかったです」と回答し、健康会議の感想では「がんについてのクイズは、もしもがんになった時に役立つと思った」「中学生が考えた健康はわたし達とは違かつたからなるほどと思った」などの回答があった。また、「けんこうな生活」の単元で「記憶に残った授業は何ですか」では、「中学生との健康会議」が、1位と2位を占めた。「健康な生活の授業から健康について考えるようになりましたか」では、87%の子どもが「はい」と回答している。

記述欄には「健康のイメージが変わった。すごくおもしろかった」「健康の授業をして分かった事は、健康でいるために手洗いうがい消毒をすることもわかったし、運動や睡眠も加えてしっかりした生活を送らなければいけないということがわかりました」と長文の記述をした児童もいた。

深澤(2019)によると、「他者視点を取り入れることで、より様々な項目で行動変容につながる可能性があることが示唆されたため、他者にも目を向けられるような教育を小中の接続を意識しながら検討していく」と示唆している。そのため、今後も班活動等、仲間との活動のみならず、中学校とも連携しながら、保健教育の充実を図っていくことの大切さが、この事後アンケートを通して明らかとなつた。

4. 中学校の授業実践

1) 対象と実施時期

対象: 中学校 2年1組 35名

2年2組 35名

2年3組 36名

単元: 「健康な生活と疾病の予防

～がんの予防～」

実施年月: 令和2年10月～12月

2) 単元構想

保健体育 3時間で実施

表1 単元構想

時数	主題	目標
	健康会議 1	小学生とオンライン会議をして、中学生が考える「健康」はどのような状態か伝える。
1	がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について自己の取組をまとめよう。	がんについての知識を得ると共に、がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について自己の取組をまとめよう。
2・3	がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について、小学校3年生にわかりやすく伝えるために、考えをまとめよう。	がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について、小学校3年生にわかりやすく伝えるために、グループで考えをまとめることができる。
	健康会議 2	がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について、小学校3年生にわかりやすく伝えることができる。

3) 第1時

(1) 主題

がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について自己の取組をまとめよう。

(2) ねらい

がんそのものの理解やがん患者に対する正しい認識を高めることを通じて、生徒が自らの生活習慣について振り返ると共に、健康を適切に管理できる力を身につけることこそが、望ましい生活習慣の確立のために大切であると理解させる。

(3) 概要

第1時では、がんの発生要因とリスクを軽減する方策を探るため、「がんという疾患」「がんの予防」「がんの治療」という3つのテーマについて、知識構成型ジグソー法を用いた学習を開催した。

活動グループは、健康会議で活動した5～6人組のグループとした。

エキスパート活動では、各グループに3つのテーマの資料を2部ずつ配付し、グループ内で話し合いの上、自らが調べるテーマについて決めさせた上で個人の調べ学習を行った。

その後のジグソー活動では、グループ内で3つのテーマについて情報を共有し、がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりする方法についてクロストークを行った。



〈クロストークの様子〉

クロストークでは、互いの情報を熱心に聞きながら、メモをとる姿が見られた。生徒が記入した交流メモには、多くの生徒が「がんは2人に1人がなる」「がんは全体の6割、早期発見すれば9割が治る」「がんは進行するほど治りにくいので、検診による早期発見が大切」「がん予防に重要なのは禁煙、禁酒、肥満防止、食事（野菜・果物）を取ること」「国は検診受診率50%を目指している」「心のケアも大切」「クオリティーオブライフ」といったキーワードを強調し、記入していた。

授業の終わりに自分の考えをまとめたものが次のとおりである。

⑤病気を防ぐために行うものだと思っていた、バランスのよい食事・運動などが、がんの予防にもつながっているのだということに驚いた。重い病気というイメージの強かったがんだが、早期に発見できれば9割の人が治ると分かった。病気のことについてあいまいな“イメージ”で怖いと考えるのではなく、しっかりと知識をつけたうえで、正しい“イメージ”を持ちたい。
⑥がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするためには、日頃から健康的な生活を送ることだと思う。がんは何年もかけて成長し、急にあらわれることはないので、少しづつの積み重ねが大切だと思う。

4) 第2・3時

(1) 主題

がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について、小学校3年生にわかりやすく伝えるために、考えをまとめよう。

(2) ねらい

小学校3年生との対話的学びを通じて、生徒自らの生活習慣について振り返るとともに、健康を適切に管理できる力を身につけることこそが、望ましい生活習慣の確立のために大切であると気づかせる。

(3) 概要

小学校3年生との健康会議を振り返り、1学期「健康な生活と疾病の予防 健康の成り立ちと疾病の発生要因」で学習したWHOによる健康の定義を再確認させた。

次に、小学校3年生の生活習慣についてのアンケートを確認し、自らの生活と照らし合わせる活動を行った。その後、各グループに分かれ、小学校3年生にわかりやすく伝えるための方法について、話し合い活動を行った。

各グループには、実際に「健康会議2」で話をするペアグループの小学校3年生個人アンケートと、話し合いのためのワークシートを配布した。交流10分間という短い時間の中で、「どのような内容にするのか」「どのような方法で伝えるのか」「時間配分、役割分担」の3点を中心に考えるようワークシートを作成した。

生徒達は、小学校3年生にどのように説明をしたら良いのか、言葉を選びながら相手の発達段階に合わせてわかりやすく伝えようと考えていた。早期発見・早期治療の大切さについて、「体の中にがんが見つかりました。ステージ赤ちゃんなので、まだ間に合います。早く見つかってよかったです。一緒に治しましょう。」と表現したり、「がんの進行スピードがゆっくりな時は各駅停車、進行スピードが早くなると新幹線くらい。」と乗り物の速さに例えたり、「運動は走ることや、泳ぐことが良い。」と具体的な運動を例に出したりと、様々な具体例を交え、自分達の言葉に落とし込んで説明しようとする姿が多く見られた。

また、話し合いの中で行き詰った際、小学生の事前アンケートを振り返り、小学生の疑問点に着目し、疑問点に対する説明を考えることができた。



〈班での話し合いの様子〉

授業の終わりに自分の考えをまとめたものが次のとおりである。

- ◎がんは食生活に気をつけたり、適正体重を保つたり、体を動かしたりするという基本的な生活習慣により、予防することができる。そのため、子供の頃から整った生活習慣を身につけておくことが大切であると思った。生活習慣を意識していても、がんなどの病気になってしまうことはあるので、こまめな定期検診や健康観察などを通して自分を見つめ、早期発見・早期治療ができるようにしておく必要があると学んだ。肉体的にも精神的にも健康に生活するためには、クオリティーオブライフの維持、向上に取り組んでいくことが欠かせないと知った。豊かな生活を送る上で最も大切なのは、自分を見つめ、自分らしく生活することだと思った。
- ◎小学生との交流において、がんについて興味を持っている3年生に正しいことを伝え、より良い生活習慣について考えもらいたい。自らのからだや心を守るのは自分なのだから正しい知識と共に考え方、向き合い方について交流し、生活の質を高めたりすることが大切だと思った。

4) 健康会議2（オンライン会議）…中学校主催

（1）対象と実施時期

- 対象：①小学校3年1組／
中学校2年1組・2年3組前半
 - ②小学校3年2組／
中学校2年2組・2年3組後半
- 実施時期：令和2年11月末～12月上旬
時間：小学校…モジュール
中学校…朝の会の15分間

（2）主題

- ア) 小学校：中学生から生活習慣やがんの予防についての話を聞いて、自分の生活を考えよう。
- イ) 中学校：がんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりするための方法について、小学校3年生にわかりやすく伝えよう。

（3）ねらい

- ア) 小学校：中学生から生活習慣やがんの予防の話を聞いて、自分の生活習慣を振り返り、健康課題に気づき、未来の健康に目を向ける姿を育てる。

イ) 中学校：小学校3年生との対話的学びを通じて、生徒が自らの生活習慣を振り返り、健康の保持増進や回復に主体的に取り組む態度を育てる。

（4）概要

中学生には、生徒一人ひとりが前時で学んだ概念的知識を自分の言葉に落とし込み、オンライン会議を通して小学校3年生にわかりやすい言葉にかみ砕いて説明することを意識させた。

交流するグループは、健康会議1で行ったグループと同一とし、オンライン会議システムを利用し交流を行った。

当日、全体会では中学校養護教諭が目的と当日の流れ、注意事項について説明した。その後、ブレイクアウトセッション機能を利用し、ペアグループに分かれて交流を行った。

グループ交流の司会進行は中学生が行った。保健体育科の授業内で考案したがんになるリスクを軽減したり、健康を保持増進したりする方法について、クイズや劇、ペーパーサート等を取り入れながら、交流を行った。



〈小学生にペーパーサートを使用し説明する中学生〉

中学生は、回線上のタイムラグに苦戦しながらも、小学生に向け、反応を確認しながら交流を行っていた。通常の学校生活では見ることのない、優しい笑顔をうかべながら、ゆっくりとした言葉掛けで交流を楽しんでいる様子が印象的だった。中学生の話を聞き終えた小学生が、思わず拍手をしている姿も見られた。

6) 倫理的配慮

がん教育実施にあたり、事前に中学校2年生保護者に対し「がん教育の授業実施について」の文書を配付した。特に配慮することがある場合は、担任または養護教諭に伝えてもらえるよう明記し、配慮が必要な保護者には、教育相談時に担任からの説明と配慮事項について確認を行った。

7) I C Tを利用した事後アンケート調査

事後に再びアンケート作成ソフトを利用し、アンケートに回答させた。「あなたはがんについてどのような印象を持っていますか？」の回答には、授業前のアンケートでは「こわいと思わない、どちらかといえばこわいと思わない（10.8%）」

「どちらかといえばこわいと思う、こわいと思う（87.2%）」「わからない（1%）」だったのに対し、授業後のアンケートでは「こわいと思わない、どちらかといえばこわいと思わない（30.8%）」「どちらかといえばこわいと思う、こわいと思う（67.3%）」「わからない（1%）」という結果になった。

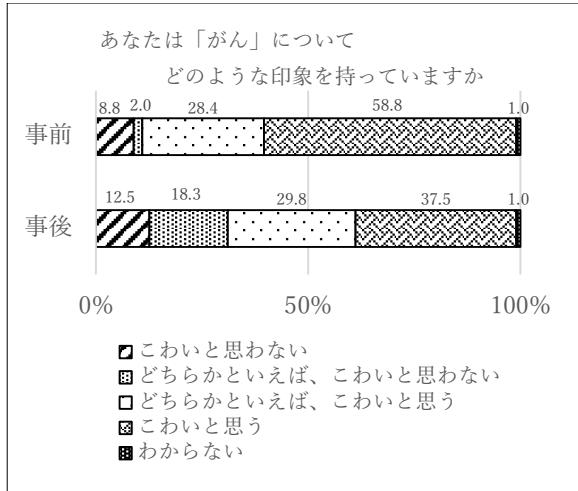


図1 がんについての印象

また、「がんは治療で治ると思いますか？」の質問には「治ると思う」と回答した生徒が授業前に比べ38.7%増え63.7%という結果になった。

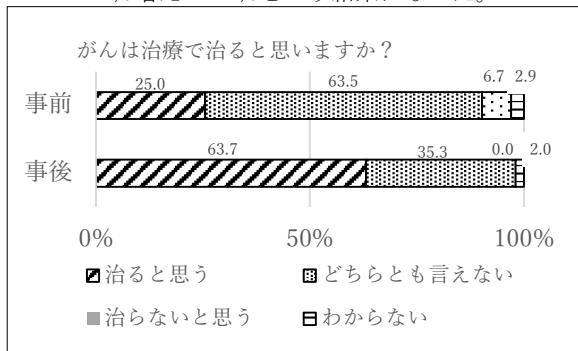


図2 がんの治療に対する認識

「『がんの予防』の授業後『がん』に対するイメージは変わりましたか？」の質問には、68%の生徒が変わったと回答した。

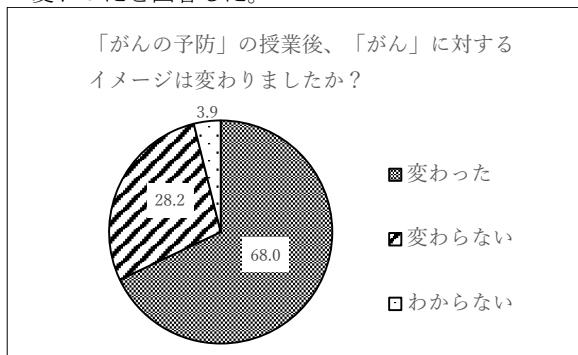


図3 授業後のがんに対するイメージの変化

「『がんの予防』の授業や小学校3年生との『健康会議』を通じて、あなたの『健康』に対する考え方や日常の行動はどう変わりましたか？（複数回答可）」の質問に最も多かった回答は、上から順に「もっと健康に気をつけようと思った（71人）」「がんに対する情報に敏感になった（44人）」「健康に関する情報が気になるようになった（38人）」「自分の体調の変化に敏感になった（35人）」と続いた。一方で、「何も変わらなかった（18人）」「今は健康なので、今の自分には関係が無いと思った（5人）」と回答した生徒もいた。

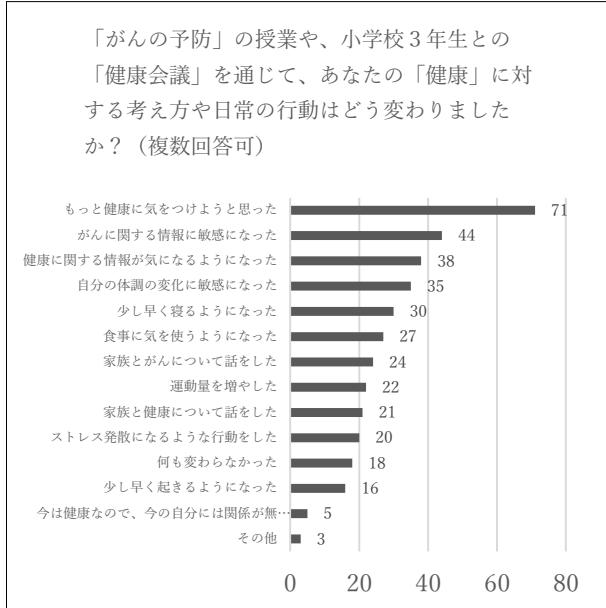


図4 実践後の意識や行動の変化

以下、授業実施後の事後アンケート生徒記述である。

- ◎小学3年生のみんなが楽しく、積極的に健康会議を行い、たくさんの知識を取り入れてくれたので、こちらとしてもとても嬉しかったです。また、私達中学生が初めて聞いたようなことも授業では出てきて、それらを小学3年生のみなさんにどのように伝えていくべきか考えていくうちに、私たちの学習意欲も高まりました。今回の健康会議が3年生のみなさんにとってよい知識となり、よりよい学習をすすめて、今からがんに対する予防をたくさん行ってもらえた嬉しいです。
- ◎小学生に癌について話をすることで自分自身の健康に対する意識や癌についての知識を深められたと思う。良い経験になったと思う。
- ◎健康について再確認することもでき、そして自分の知識もさらに深めることができたので自分にとっても周りの人にとってもよいものになったのではないかと思いました。がんだけではなく他の病気も学年という壁を超えて交流していきたいなと思いました。
- ◎自分が癌についてあまり知らない人に教える立場として、伝えることの大切さ、難しさを知ることができた。また、癌について人に伝えられるくらい知ることができてよかったです。

アンケート結果から、生徒ががんについての知識を習得し、小学校3年生に説明をするために知識をとらえなおす過程が、学びの深まりや表現力の広がりにつながったと考えられる。生徒は、健康な生活とはどのような生活を言うのか、健康に過ごしていくために必要なことは何なのかと自分にひきつけて課題化し、小学校3年生に伝えることができていた。この実践を通じて、生徒の「保健の見方・考え方」を鍛えていくことにつながったのではないかと考える。

5. 成果

今回の小学校・中学校の連携では、保健教育をどのように学び、何を学び、何ができるようになるかという児童生徒の具体的な学びの姿を考えながら、単元デザインを行ってきた。ICTを利用して行ったオンライン会議での小学生と中学生の間の「対話的な学び」は、双方向で健康についての興味や関心を高めることができ、自他の健康についての課題解決を目指すことができたと言える。さらに、小学生の振り返りの記述にもあったが、知識の広がりや学習意欲が高まり、調べ学習をしてみようと思う意識への変化もみられた。また、ICTを利用することで、小中学校の連携や対話的な学びも時間や場所をそれほど気にすることもなく実施できることも利点であった。児童生徒のニーズや実態に合った保健教育を進めるうえで、ICTの利用は有効な手立てであることが推察された。

6. 今後の課題

ICTを推進していくためには環境整備は必須である。今回、初めてICTを利用した連携を行ったため、知識が不十分でトラブルがあった際の対処の方法がわからず、他教職員と連携しがらでないと実践できなかったことや、Wi-Fi環境の確認やタブレット端末の準備など、事前準備に時間がかかったことなどがある。また、通信環境も十分ではなく、Wi-Fi環境の不安定さもあり、健康会議の途中で話が途切れるといったこともあった。また、リアルタイムとはいえ、オンライン会議にはタイムラグがあり、コミュニケーションを取るのに歯がゆさを感じたと答えた児童生徒も複数いた。情報機器のトラブルや、回線の遅延という事態に見舞われ、児童生徒の意欲に十分答えることができなかった点が課題として挙げられる。しかし、そのような状況下でも、音声がつながらなければホワイトボードで会話をしたり、短くなった時間の中で、伝えたい内容を短く再構成したりと臨機応変に対応できた中学生の姿に、小学校、中学校それぞれの研究で積み上げてきた成果を感じることもできた。

今後は、GIGAスクール構想により、一人1台のタブレット端末やPCの配布、通信環境の充実なども予定されていて、さらに活用も活発化していくと思われる。ICTを取り巻く環境が整備されていくことにより、今回の実践はさらにICT活用の幅を広げられることになるのではないかと期待する。

今後、静岡大学教育学部附属浜松小学校と中学校が、小中一貫校化になる利点を活用し、保健教育を推進していくための連携強化をしていく。感染症の流行が未だ収まらず先の見えない状況ではあるが、今だからこそ、保健の学習内容における学びの連続性を意識し、

小中が連携して実践を重ねていく必要性がある。本研究の取り組みを、地域の公立小中学校に拡大していくことや、県内や全国、世界に目を向け、ヘルスリテラシーの観点からも視野を広げ、効果的で充実した保健教育の実践にも向かって研究を重ねていける可能性を秘めている。

7. 引用文献

- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説保健体育編』
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説保健体育編』
文部科学省『「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き』
深澤多恵、鎌塚優子（2019）「学びの継続性を意識した小学校・中学校における保健教育に関する研究：学習内容の印象に関する実態を手がかりとして」、『静岡大学教育実践総合センター紀要』、30、pp. 272-279